

氏 名 韓 玲 玲

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1737 号

学位授与の日付 平成27年3月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 満洲における北村謙次郎の文学活動

論文審査委員 主 査 教授 松田 利彦
教授 伊東 貴之
教授 劉 建輝
名誉教授 岸 陽子 早稲田大学
教授 浦田 義和 久留米大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本論は、「満洲文学」（「満洲国」における日本語文学）研究の一環として、北村謙次郎の創作活動を考察するものである。

これまでの「満洲文学」についての研究は、個々の文学者を対象とする作家論、作品論の類に関しては、相当の研究的蓄積を見るところとはいえ、多くは断片的な論にとどまっている。例えば、一人の作家の文学活動の全過程を、「満洲」との関わりという視点から、精密かつ具体的に実証していくような研究は、いまだ現われていない。

本研究では、北村謙次郎という一人の作家を採りあげることにする。彼は「満洲文壇」を代表する存在であったし、その生涯の前半期を通して、満洲と深い関わりを持ち続けた。彼は満洲における「唯一の職業作家」とも言われていた。

ここでは、彼の文学的・生活史的な足跡を、あたらしく入念に追っていくことにする。彼を通して、満洲国の首都・新京を中心とする日本人一般の文学・文化活動の諸相を相当程度に明らかにすることができるだろう。異国（中国東北）において、支配の民族として、自国（日本）の言語で文学表現に関わるといふ行為とは、一体どうしたことだったのだろうか。それも、当の作家の単独的な営為にとどまらず、一つの「運動」として表現者たち個々を組織し、その内部に異民族（主として中国人文学者）までを引きずり込もうとする活動に到っては、これをどう見ていけばよいのだろうか。

満洲国で活動した日本人文学者は、大きく二つのカテゴリーに分けることができる。その第一は、満洲国が成立（1932年）する以前に、この土地に生まれるか、日本から移住してきて、この土地で文学活動を開始するようになった人たちである。その第二は、満洲国が建国され、いくらかは軍事的・政治的・社会的な安定が見られるようになったころ、日本から渡ってきた人たちである。後者の多くは、日本で一定程度の文学活動を経験し、多少とも日本文壇とのつながりも有していた。しかし、北村謙次郎は、この二つのどちらにも属しない作家だった。

第1群の人たちは、自分たちの「文学的アイデンティティ」を日本文学や日本文壇に求め

るのではなく、満洲という土地に根差した新しい文学を作りあげたいと考えていた。当時、「満洲独自の文学」といった理念を提唱し、実践しようとした詩人・作家たちである。日本文壇から切れることを積極的に意識していた。第2群の人たちは、そのアイデンティティが日本に帰属することを自明としていた。満洲文学を日本文学の延長、あるいは飛躍であるというふうに考えていた。従って彼らの多くは、日本の文芸雑誌に作品を発表したり、芥川賞を受賞したりすることを期待する傾向にあった。

北村謙次郎の場合、その民族的・言語的アイデンティティこそ日本に帰属してはいたが、文学的アイデンティティはといえば、それは分裂の相を見せていた。彼は幼少時を満洲（大連）に育ち、中学卒業後日本に帰り、やがて文学活動をスタートさせる。一時期、満洲に戻ったこともあるが、またもや東京に住み、雑誌『日本浪漫派』の同人として文壇に注目されることもあった。だが、1937年、彼は新京に行き、そこで大陸土着の文学を志すことになるのである。

彼は満洲文壇の草創と発展に力を尽くす一方、日本文壇との深いつながりも断ち切れな

いでいた。満洲と日本との間に引き裂かれた存在。このようなアイデンティティの分裂を明白に見せているのは、在満日本文学者の間では彼一人であった。その意味で彼は特異な文学者であり、孤高の作家だった。

本研究では、そのような北村の文学的アイデンティティの分裂の相に着目し、満洲と日本の中に裂かれた彼の思想の矛盾、揺れの機微に分け入っていく。そのことによって一人の作家像と満洲文学の実態とを、より生き生きと浮き彫りに出来るだろうし、延いては、近代における中国と日本の裂け目にも洞察が及ぶ。

研究方法としては、実証的な歴史研究を基礎作業に、北村謙次郎および同時代の日本人作家の作品を視野に入れ、テキスト分析など作品論を採用して、北村の作家としての生き方を描くことにする。

これまで北村文学に関する書誌的研究はまったくなされていないので、新資料の発掘、その書誌的調査を最初の出発点とした。資料収集に当たっては、各種の図書館や文学館を利用する一方、このジャンルの研究者や北村の遺族ともコンタクトを取った。また、北村の生きた時代を実感するため、現地調査及び関係者からのヒアリングを再三行った。

論文の執筆に際しては、これらの資料を分析しつつ、北村の生活経歴と創作過程を縦軸に、主要著作の解説を横軸として、この作家の満洲における文学活動の全容を解明し、彼の文学的全体像、及び、その思想体験の意味を考察していく。

本論は全6章から成る。第1章では北村謙次郎の生涯を概観する。その生い立ちから、大連での植民地体験、満洲国での文学活動、引揚げ体験、その逝去までを詳述している。第2章では、北村の初期文学を見ていく。学生時代の習作期、文壇への足がかりとなった個人誌『文芸プランニング』における実験的作品、同人雑誌『日本浪漫派』における初期の佳作など

を通して、彼のモダニズム体験の変遷を検証する。第3章では、彼が主宰した文芸雑誌『満洲浪漫』について論じる。満洲文学における同誌の歴史的意義を問うと同時に、彼が大陸で追求した文学理念（ロマンチズム）の実質を探求している。第4章では、種々の雑誌に断続的に発表された連作小説「或る環境」を採りあげ、再評価を試みる。世に知られざる彼の代表作だと見てよい。主として、自身の少年時代に材を求めたものだが、ここには作者の満洲体験の原点が明白である。第5章では北村の在満時代の唯一の長篇小説であり、一般には彼の主著と目されている「春聯」について論じる。彼が満洲国をどう見ていたかという問題設定を通して、この時期の彼の思想の実質に迫っていく。第6章では、北村文学における「他者」という視点から、その文学の多様性を考えてみる。ここでは、作品に描かれた「女性イメージ」、「白系ロシア人問題」、「開拓移民像」などといった切り口からアプローチする。前章までに扱いきれなかったテーマを、ここで検証する。

全6章を通して、二つの結論に達する。第一には、北村を中心とする満洲における日本人の文学活動の実態、及び満洲文壇における数多くの内面的な問題が浮上してくることである。それによって、日本文壇と満洲文壇の相互影響、満洲文壇における日本人の思想動向、及び、「満洲国」という特殊の環境下に行われた日中両国人の文化交流などを理解することができる。

第二には、時代に巻き込まれた一人の作家北村謙次郎の生き方、彼の日本と中国の間におけるアイデンティティの動揺、時代に妥協しながらも抵抗していた姿が明らかとなる。「満洲国」体験は、北村という作家にいかなる影響を及ぼしたのかという問題に対しても、

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

彼の戦後の創作に織り込まれた喪失感から窺い知ることができる。

本論は、北村に関する基礎研究として位置づけることができる。「満洲文学」の歴史における、複雑にして細かな側面については、さらに今後の研究課題としていきたい。

博士論文の審査結果の要旨
Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、戦前における「満洲」（以下、「満洲（国）」の括弧を省略する）文壇の中心人物であり、文芸雑誌『満洲浪漫』を主宰した北村謙次郎（1904～82年）の生涯と文学作品について、その全体像をはじめて明らかにした論考である。

序章では、北村の文学的・生活史的な足跡を、可能な限り精密に追うという本論文の課題が述べられている。

第1章「北村謙次郎の生涯」では、少年時代の大連経験を跡づけた後、1923年の東京上京後の学歴と文芸雑誌『文芸プランング』の創刊、34年の大連行きと『日本浪漫派』との関係、在満日本人作家として最も活躍した37年以降の活動などを丹念に辿っている。

第2章「北村謙次郎文学におけるモダニズムの変容」は、北村が1937年に渡満するまでの文学活動を検証する。1920年代後半、個人雑誌『すなつぼ』『文芸プランング』において、北村のモダニズム文学は一つの結実を見た。しかし、満洲事変（1931年）に衝撃を受けた北村はリアリズム文学への脱却をはかるとされる。

第3章「北村謙次郎と『満洲浪漫』」は、北村が1938年に新京で創刊した文芸雑誌『満洲浪漫』を考察する。刊行の経緯と各号の内容を詳細に検討し、北村の人脈にもとづいて執筆陣を分類している。そして、『満洲浪漫』での北村の言説に対する分析を通じて、その芸術至上主義、および、満洲在住日本人と他民族の融合を求めて主張した「大陸ロマン」という文学理念に着目している。

第4章「北村謙次郎の「或る環境」—異民族との共生」は、北村の少年時代の満洲経験にモチーフをとった連作小説「或る環境」に光を当てる。この小説に描かれた主人公の中国人に対する認識の変化を追究し、北村が文学を通じて異民族に対する尊敬に立った共生を求めていたと評価した。

第5章「北村謙次郎の「春聯」—「大陸日本人」への道」は、長篇小説「春聯」（1941年）を考察する。小説にあらわれた満洲への愛着、ロマンチズム、主人公のジレンマに対する分析を通じて、北村が、限界を持ちながらも、母国の生活習慣に執着する在満日本人に批判的な心情を抱いていたことや、満洲国の建国イデオロギーから一定の距離をおこうとしていたことを明らかにしている。

第6章「他者への関心」では、主に戦時期末期の北村の文学作品を取りあげ、それらに通底する「女性」「白系ロシア人」「開拓民」という三つの問題を扱い、北村の「大陸ロマン」や異民族観を考察している。

終章では、北村の生涯と文学活動を再整理しながら、今後の課題を提示している。

本論文には、次のような意義が認められる。

まず、満洲における唯一の日本人職業作家でありながら、これまでその足跡が十分に判明していなかった北村謙次郎の生涯を明らかにした。特に遺族と面会することに成功し、北村の日記をはじめとする多くの個人史料を入手したことは特筆されてよい。あわせて、基礎的な書誌学的研究すらなかった北村の文学作品について、戦前満洲での刊行文献など内外の資料を調査し、従来知られていなかった多くの作品を発掘したことも本論文の大きな成果である。こうした資料の博搜の上に成り立った本論文は、北村文学の形成過程、満洲国の建国イデオロギーに対する北村のスタンス、満洲における日本人文壇など、重要な論点を数多く提示している。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

また、こうした作業を通じて、いまだ断片的な作家論・作品論の研究にとどまりがちな「満洲文学」研究に対して、一人の作家の全体像の輪郭を描くという方法論を提示した。本研究が今後の北村謙次郎研究のみならず「満洲文学」研究全体において、必ずや参照されるべき重要な基礎的研究となることは間違いない。

反面、本論文に問題が残されていないわけではない。まず、北村の文学活動を歴史的背景・時代状況との関わりで捉えるという面はなお不十分であり、たとえば満洲事変が北村にもたらした影響とそれによる北村文学の変化についてはさらに掘り下げて考察すべきだと考えられる。『満洲浪漫』と日本浪漫派の関係についての解釈や同時代の他の在満日本人作家との比較も、より深く追究する余地がある。また、「モダニズム」「リアリズム」といった概念規定が先行している部分も見受けられるため、文学理論を踏まえつつ、個々の作品に即して、より丁寧にその文学性や芸術性を分析していくことも今後の課題として残されている。ただし、これらの点の多くは、本論文が北村の全体像を解明したことによって改めて見えてきた課題であることを考慮し、今後、研究の視野の拡大によって克服されると審査委員一同は判断した。

以上を総合的に検討した結果、本論文を、博士学位の授与に値すると審査委員全員一致で判定した。